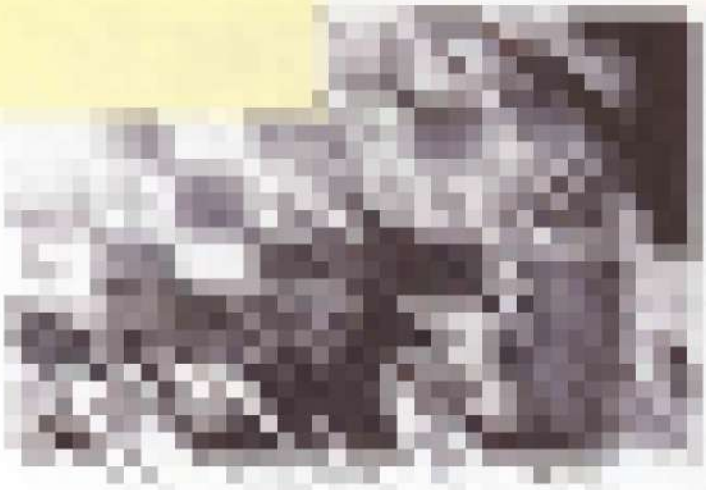

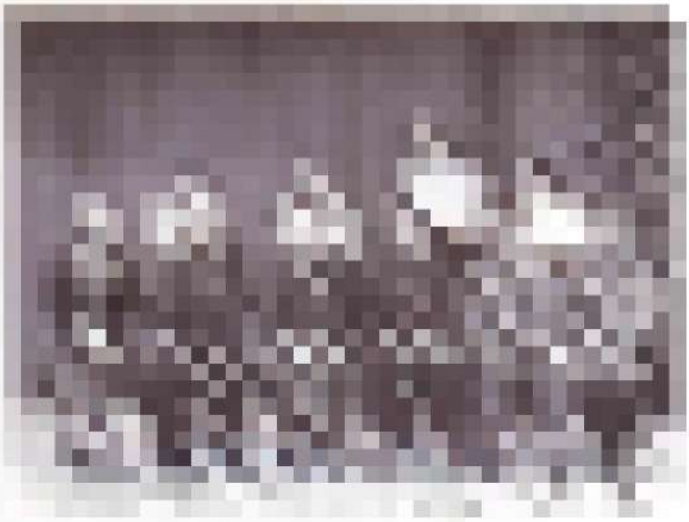

News チューリヒ歌劇場がバレエでヴェルディ「レクイエム」

ヴェルディ生誕200周年の記念年に、チューリヒ歌劇場バレエ芸術監督のクリスチャン・シュプックがインタヴューで、「彼の『レクイエム』は一番心を動かされる楽曲で、振り付け意欲を刺激される」と語ったことに端を発して、バレエ付きの「レクイエム」が実現した。

宗教を超えた人間の生と死をテーマにしたという雄弁なバレエ団、ファビオ・ルイジの細やかな心遣いで練られたオーケストラと合唱団、そして繊細な楽想を歌いこなせるソリストたちのすべてが揃っていた。ソプラノのクラッシミーラ・ストヤノヴァとバスのゲオルグ・ツェッペンフェルトはイタリア的ではないが気品のある温かい声で、ドラマティックに傾いた「レクイエム」に救いを与え、メゾソプラノのヴェロニカ・シメオーニとテノールのフランチェスコ・メーリはイタリアらしさを与えてくれる。その割合が、イタリア出身だがドイツで研鑽を積んだルイジの趣味とマッチする。

幕が開くと黒ずくめの舞台の左端に合唱が集まり、ピーター・セラーズの《マタイ受難曲》の2番煎じかと思いきや、息をもつかせないエネルギーの継続は、音楽だけでも十分にドラマティックなこの「レクイエム」を太枠で強調したような凄いパワーだ。オーケストラも冒頭から並外れた集中力を示し、極上の*pp*で劇的状況を盛り上げたが、速い部分ではテンポが走ってしまう。また、「アニュス・デイ」ではソリストが舞台中央に近かったからか、フルート等のソロ楽器が目立ってしまったが、新境地として成功を収めたと言えよう。 (中 東生)

新境地として成功を収めたチューリヒ歌劇場のヴェルディ「レクイエム」バレエ版 ©Gregory Batardon